

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
内田 忠賢 学科長



せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



【川田】

皆さん、こんにちは。私は今回の対談シリーズを企画しました、せとうち観光専門職短期大学、助教の川田と申します。よろしくお願いいたします。

今まで地域のキーパーソンの9名の方々と対談を行ってまいりました。今回はこれまでの対談を振り返ってお話を進めていきたいと思ひます。

せとうち観光専門職短期大学、安村学長と観光振興学科、内田学科長、どうぞよろしくお願いいたします。

【安村・内田】

よろしくお願いいたします。

【川田】

まずは2025年に開催された瀬戸内国際芸術祭ですが、今回は東かがわ市、そしてさぬき市が新たな会場として追加されました。第3回目の対談で東かがわ市の上村市長、そして第4回さぬき市の大山市長と対談する中で、「地域での

観光客の受け入れ方」というトピックが上がってきたかと思います。その中で印象に残ったお話などお聞かせいただけますか？

【安村】

両市長とも地域の住民の方が観光客に対して様々なおもてなしをするというお話が出たかと思います。これはとても大切なことだと思うのですが、まちづくりで住民のホスピタリティやホスピタリティマネジメントについてよく言われますが、あえてそれをする必要があるのか、あえてホスピタリティマネジメントを住民にこういう風にしてほしい、というまちづくりでの方策は必要なのかということについて、私は少し疑問を持っています。普段から住民同士で挨拶をしているような住民の社会関係、人間関係が良いところというのは、外から来た訪問客に対しても自然におもてなしや挨拶をしたり、交流の会話ができたりすると思います。今回、両市長に伺ったところ、その地域住民の中でコミュニケーションがとてもよくできているので、自然におもてなしができていました。瀬戸芸が終わってみると、住民の中で訪問客との交流が非常にうまくいっていたという話も聞いています。私は、市長のお話や実際に住民と瀬戸芸に来た訪問者との交流がうまくいっていたことが素晴らしかったなあと感じました。そして、それは両市長が言っておられたそのままだなと感じました。ただ、観光産業の人が、おもてなしを考えることやホスピタリティマネジメントをやることは当然だと思います。当然、接客してサービスを提供し、その対価として料金をもらうということですから。これは必要ですが、先ほど言いましたように、住民が訪問客に対する時には、普段の住民の中での社会関係、人間関係がそのまま訪問客に提供できると。この辺が市長の言っていた住民の間で実践できていたということが素晴らしいなど。これは後でお話も出てくると思うのですが、地域の方のおもてなしの交流が素晴らしいというのはお遍路が関連していて、それがうまくいっていたんじゃないかなと思います。お話を聞いていた通りだなというのが、私の感想ですね。

【川田】

ありがとうございます。さぬき市がちょうどお遍路さんの最後の三つのお寺があって、お遍路さんにお接待するというお話があったと思いますし、東かがわ市の引田というところが「風待ちの港」と言っていて、昔から（出航のための）風を港で待って、旅立っていく方がいらっしやっただけで、外からの訪問者が滞在する地域だったというお話がありました。内田学科長、いかがでしょう？

【内田】

ありがとうございます。

今、安村学長がおっしゃったのは、安村観光論の幹の部分ですけど、コミュニティが出来上がっているか、それこそが持続可能な観光を続けられるか、というお話だと思います。

私はそれに付け加えますと、東かがわ市とさぬき市の地域の背景の違いとか、特に上村市長は手袋のほか、産業観光の産業を活かしながらどのようにアピールするか、どのように地域の人たちにプライドを持ってもらうかという辺りもお話しされていたと思います。さぬき市の場合は大山市長が、平賀源内の話や、お遍路さんの場所がたくさんあるという文化の話がされていて、文化観光というのは県内の観光のすごく大きな位置を占めますので、産業観光が目立っていますが、そのあたりについてコミュニティの関係でお話できたのではないかなと非常に勉強になりました。

【安村】

今回さぬき市と東かがわ市は、島がないところで瀬戸芸が行われたという初めての試みだったわけですが、イベントやアートも非常にうまく、しっかり出せていて本当良かったですね。そこにうまく住民が関わっていたのではないかと思いますね。

【川田】

ありがとうございます

住民との交流や人との交流という話が出たかと思います。第6回で香川大学の原直行先生とお話ししていく中で、観光客がリピーターとなってまたその地域に訪れるかどうかというのは、その地域と観光客がどのくらい繋がったのかが重要だとおっしゃっていました。もちろん、地域で活躍しているキーパーソンの方や観光関連事業者の方々というのも、観光客と関わりがあるかとは思いますが、やはり地域住民との会話であったり、接点、交流というところもリピーターになるかどうか、大きく関わってくると思います。先ほど話題に出ました瀬戸芸も含めて、そういった可能性や課題等について何か感じたことはありますか？

【安村】

リピーター率のというのはやはり観光地の観光地域づくりという時に大変重要になってくるわけで、例えば観光まちづくりで有名な由布院は最初の頃でしたら、リピーター率が高かった。今でも他の地域に比べて相対的に高いとは思いますが、いわゆる観光地というのはリピーター。一度来ると「もういいや」というところが大きいので、その何が問題なのかと言うと、まずリピーターの基本は期待値というのがあるわけですね。この地域、あるいはこのコミュニ

ティに行くと、先ほど内田さんのお話にもあったように文化とか、その他いろんなイベントに行ってみたいとか、満足感が高いと要するに期待値と実際値がお互いに、実際値が上回らないとリピーターにはならないわけです。要するに期待していたけれども、それよりも実際値が低いとリピーターにはならない。期待値と実際値、期待していたかどうかというのが等しいと、ふと思い出して行ってみようかなというのと、やはりリピーター率が少し下がる。そして期待通りにならなかつたら、もう最悪なわけですね。問題は何かということやはりイベントや地域の魅力、観光資源や観光対象などがありますけど、それが大変素晴らしく、観光客の人たちの心に響くと、期待値よりも実際値の方が上がる。それが重要だなと思って、やはり先ほど話した住民との関わりや交流、これが大切なのかなということで、今回は今後どうなるか分かりませんが、おそらく期待値は見ていたりしたんですかね。どう思いますか？割とイベントも良かったでしょう？

【川田】

引田の古い街並のところでは地元住民の方が、おばあちゃんのバーみたいな「誰でも立ち寄ってくださいね」というところでお茶を出すお接待をして、ちょっとした休憩所に近所の方とか地域の方がいらっしゃって、交流が生まれていそうな様子をお見かけしましたね。

【安村】

今年度、我々せとうち観光専門短期大学は特に東かがわ市の引田の瀬戸芸会場で調査をやっているんですよ。

訪問客やイベントに参加した人やその他色々な観光関連産業の人たちにインタビューした結果で、おそらく

私たちがこのリピーター率に触れられると思うんですけども、今回の瀬戸芸に関わる東かがわ市引田の場合がどんな結果になるかというのは、来年2026年3月ぐらいに調査結果が出るので、是非皆さんに公開したいなと思っています。

【内田】

実際、川田先生と私でインタビューに行つて関西からもレポートしたという人



をお見掛けしました。

【安村】

調査の途中結果ですが、割と関西の人たちも年齢にもよると思いますが、瀬戸芸についての認知はあんまり高くないらしいんです。むしろ、東京や大阪の大都市からの認知度は高いらしいです。正確な結果は今はまだ分かりませんが、全般の評価は特に引田に来た人の場合、東かがわ市では高いという結果が出ているようですね。

【川田】

そうですね。観光客の方に調査しても、瀬戸芸のリピーターの方が結構多いですね。全く知らずにたまたま和三盆やお醤油が欲しくて立ち寄ったところ、瀬戸芸をやっていたという方もいらっしゃいました。瀬戸芸の期間というのはリピーターの方がいらっしゃると思いますが、やはり3年1回なのでそれ以外の時期に来てくれるかという、少し難しい問題があるのかなと思います。

【安村】

「また来たいと思う」はインタビューでやっていますか？

【内田】

また来たいという人はインタビューをしている側に気を使ってくださった部分もあると思いますが、また来たいと思うのは。やはり瀬戸芸の良い点だと思いますが、やはり一つ作品を見たらもう一つ見たいということで、それぞれ割と工夫されていて、どう作品を見て回るかというのは皆さん考えておられます。

【安村】

さぬき市は今回調査外だったんですけど、一般の情報を聞くとさぬき市も大変うまくいっていたんでしょう？

【川田】

東だったのでセットで行かれる方が多かったですね。東かがわ市の次の目的地を聞くと「さぬき市に行きます」という方が大半でしたね。

【内田】

場所的にも関西、淡路島から近く、徳島の隣という印象があります。もちろん高松からもたくさんの方が来られますが、東からもいらっしゃいましたね。

【川田】

さらに、島ではないのでアクセスがいいという部分では、何個も会場をはしごできるというので東かがわ市に行って、さぬき市に行って、高松に行ってという方が多かったかなという印象ですね。やはり島に渡ると、その島で作品を見終わるともう1日かかってしまうので。

【安村】

海を通過して島に行くのも、またそれはそれで一つの魅力があると思います。陸でやっているものは陸でやっているもので、瀬戸芸の意味というか、観光としての意味はあったと思いますよね。

【内田】

そういう意味では交流人口、関係人口がどんどん増えていく瀬戸芸という仕掛けがありますが、その仕掛けに変わるものも生まれたらいいなと思います。

【川田】

今回いろんな人にお話を聞いていく中で、瀬戸芸に一人で来る人が結構多かったんですね。ご夫婦で来られている方もいらっしゃるんですけど、結構一人が多いんだなというのが、新たな発見ではあったと思います。

やはり一人旅は本当に一人で回りたい人と、交流を求めている人と大きく分かれると思います。私も一人旅をするので、一人で旅をするとなるとやはり地域の方と交流があれば、次、その人に会いに行こうとなります。「あの人、元気にしているかな」「ちょっとお歳暮を送ろうかな」となるので、地域の方との繋がりというのは、まさに香川大学の原先生がおっしゃる通りだなと思っています。

【安村】

そうですね。今、団体旅行は日本の社会では流行らないですけど、個人や少人数での旅行になるとすごく意識が高まるでしょう。SIT という頭文字で呼ばれるスペシャルインタレストツーリズムという、こだわりの観光旅行ですよね。そういうものが強くなる。瀬戸芸というと、アートというものがあるけども、そのアートをやる土地の自然や生態系、あるいは文化とか生態系以外に触れると、またそこに行きたくなくなるという人が増える。自然の風景がありますよね。東かがわ市やさぬき市には。



【内田】

瀬戸芸の基本が地域の人たちと一緒に作り上げるという、観光資源単体の一つあるのではなくて、周りと一緒に作り上げるということが大きいので、そういう意味では本当によくできたというよりは、よくぞ作った

という仕掛けがあります。

【安村】

なかなか市長の意気込みもすごかったですよね。住民の人にも伝わっているんじゃないですか。観光産業業界の方たちにも。

【川田】

ありがとうございます。

では少しトピックを変えまして、交通とか移動に関してのお話ですが、第1回目でJR四国の四之宮社長から、観光を意識した地域の関わりということで、観光地に行くまで、駅からその先のアクセスについてお話があったかと思えますし、第8回の高松空港の小幡社長から空港は目的地ではなくて空港から先の目的地、アクセスというお話もあったかと思えます。また、移動という観点では、レモリフのトヨタカローラ香川の向井社長は持続可能性やモビリティをキーワードに、色々な取り組みについてお話いただきました。交通にせよ、移動にせよ、インフラになるということもありますし、一定規模の簡単に始められない事業ではあるかと思えます。観光する上でもそうですし、地域でも大きな課題になってくると思うんですね。交通・移動、その辺りで何か印象に残ったことや課題等何がありますか？

【安村】

やはり観光スポットでは、イベントにしても魅力にしてもあることが多いと。そうするとあの先ほど話に出たように観光や旅行のスタイルとしては、個人やあるいは小人数での移動になってくるわけですね。そう



するとやはり今回お話にも出ましたが、遠距離はそれこそ鉄道や飛行機で行き、そこから観光スポットに行く時に、いろいろなSDGsも考えた排気の少ない自転車やその他色々な移動手段が出ていましたね。それと同時にインフラの整備もされていると。これから大変期待ができるんじゃないかなと思いますし、島の中でもそうですが、今回の東かがわ市やさぬき市にしても、そういうこともこれからよく考えながら観光スポットとの連絡をうまく作るというのは重要というのを、対談の中で感じました。そういうことを一生懸命やっているレモリフの方もいらっしゃって大変期待できるんじゃないかと思いました。



【内田】

交通で四之宮社長も小幡社長もそうですけど、交通を支えているリーダーの人たちの意識が鉄道を動かすであるとか飛行機を飛ばすというのではなくて、地域をどう元気づけるか、どういう風に地域創生をやるの

かという辺りにすごく意識がいつているというのを知ることができて、とても勉強になりました。JRはJRの路線だけ考えるのではなく、沿線はかなり意識しながら運営をしているのだと分かったということもありますし、空港と言っても、空港単体では全然ないという、この辺りは本当に勉強させていただいたと思います。また、レモリフの向井社長は郷土愛をすごく強調されていました。観光というよりは地域創生は地元出身じゃなくてもいいんです。小幡社長は東京の方でしたし、やはり郷土愛は観光にもすごく大事なキーワードになるのかなと私は考えていました。

【安村】

そうなんですよね。交通業の方も地域関係で色々やっている方も、内田さんが言われたように地域をととても意識しています。そこに観光が入ってるんですよね。観光と地域振興、地域とは切り離せないじゃないですか。まさにそれが観光まちづくりだと思います。もう一点言われたように、住民が郷土愛を持っていて他の地域から来る人にこんな地域の魅力を見せたい、それが文化であり、自然であったりする。そういう関連が交通事業者や地域関係の人たちの中で出てきたときに、やっぱり観光・地域振興はこれからどんどん進んでいく。もちろんその間に移動の手段があるわけで、だんだん観光と地域の面でまとまりがいくつか出てきた。そこに住民も関わって、いい感じになっているのではないかと思います。私が勝手に思い描く観光まちづくりのイメージが、この対談で非常にはっきりしてきたなというのがありますね。

【内田】

地域を元気にする時に、例えば農業だったり漁業だったりという話がありますが、現在はプライドを持って農業する、プライドを持って漁業する、という方はたくさんおられて、そういう方が六次産業化という、必ず地域を元気にするということにつながっていて、やがていろんな人に知ってもらう、見てもらう

という話になると観光に必ず繋がるので、地域に関わるとありとあらゆることは全て観光につながるし、観光につながったがためにオーバーツーリズムじゃないけど、困ったなということもありうるかもしれないのですが、観光につなげることによってより可能性を広げるっていうのも確かだと思います。

【川田】

先ほど言われたように、観光と地域創生が切り離せず一緒に進んでいくということ、色々な方々からお話を聞く上で本当にそうだなという風を感じました。やはり地域の方と連携して、いろんな取り組みをされていたかと思います。中津万象園の真鍋社長や、レモリフの向井社長や、高松信用金庫の大橋理事長も地域の方と色々連携しながら取り組みをされていますが、なかなか難しい、進まないというお話もあったかと思います。お金のことであったり、その地域の縄張りと言うと少し誤解を生むかもしれませんが、その地域ごとのしぼりがあったり、役割分担と様々な課題があったと思います。それぞれの方が地域連携をして取り組まれています、今後もっと香川全体、四国で連携が進むにはどういったことが必要なんですか？

【安村】

難しいですね。中津万象園の真鍋社長は、庭園を是非専門家に見てもらって、魅せ方を考えたいですねというお約束を果たせてませんが、仲間に連絡はしてるんです。できれば2025年内と思っていましたが。向こうも乗り気で、おそらく中津万象園だけではなく、それぞれの場所で魅せ方というのが一つ出てくるのかなど。そこはいろんな工夫ができると思いますが、同時にまた先ほどの話した「移動」ですよ。これも絡めて、魅せ方というものをそれぞれ工夫する必要があるかなという観光スポットもあるということが、今まで対談をやってきた印象ですね。

【内田】

中津万象園はすごくいいお庭ですが、やはり地域外の人になかなか知られていないということがもったいないですよ。だから先ほど学長がおっしゃったように魅せ方というのもあるし、売り出し方というか、その辺りではないかと思います。また、先ほどお話に出ました真鍋社長、向井社長、大橋理事長はやっぱり郷土愛、いずれもすごい郷土愛でした。

【安村】

ゲストの皆さんは本当に工夫しているんだけどね。素晴らしいと思います。まずそれがあって続いているのではないかと思いますし、是非我々も一緒に盛り上げるようなことをしていきたいですね。せと短としてもね。

【川田】

そうですね。この郷土愛。真鍋社長、向井社長、大橋理事長は確か皆さん香川出身の人ですよ。せと短の学生のことを考えると、香川出身の学生たちもいますし、県外から来る学生たちもいます。郷土愛を持っている、地域に愛着を持っている人材がその地域を良くしたいと思って、頑張ってくれると思います。そういった郷土愛を育むにはどういったことをしたらいいのでしょうか？

【安村】

観光まちづくりで重要な郷土愛がある人物を、キーパーソンという言い方をしていましたけど、キーパーソンの一つの特徴が一時漂泊者というのはありますよね。一時漂泊者と言ったのは鶴見和子さん。内発的発展という言葉があり例えば、資本や技術やスキルなどを地域の外から持ってくるのではなく、地域の内部から、一般的には住民ですよ。住民が自分たちで地域を良くしようと、まさに観光まちづくりだったわけです。内発的発展論では、地域の外の人たちに見せて地域を活性化させようという時にリーダーになる人はやはり必ずいます。そういう人たちをキーパーソンと言います。その時のキーパーソンの一つの特徴として一時漂泊者という特徴があります。一時漂泊者とは、その地域で生まれて、大学進学や就職で一度県外に出るわけです。



大都市を見て、そこで就職する人もいますが、やはり地元で郷土愛を改めて感じたり、あるいは元々郷土愛を持っていて、大都会にいるのは違うなと思いつつ結構いい職業についている人もいますよ。そういう人たちが地元に戻って、観光まちづくりの内発的発展のリーダーになる人が多く、大都市と自分の郷土とで比較できるわけですよ。お互いに良いところ、悪いところがありますが、それだったら地元のいいところをどんどん伸ばして、地域住民の高齢化が進んでいるので、他からいろんな人が集まって、活性化しようということです。

それとリピーターの人たちが、地域づくりのサポーターになったりするでしょうから、そういうものに絡めてくるといいと思うんですよ。郷土愛の一つのポイントは他を見ること、つまり視差。ここで区別することができるわけです。

よね。自分のところと例えば大都会との比較ができると自分たちの魅力というのが出てくる。やはり東京にしても大阪にしても経済的に豊かになったがゆえに、失ったものが多いじゃないですか。それは人と人の交流が少なくなってしまったり、あるいは元々ある伝統文化が消えていってしまったり。これは人間関係が崩れると文化や社会が関係していますよね。自然も少なくなってしまう。そして、そういうものが本当はいいものなんだっていう魅力が、どんどん自分の中で出てくると、俄然郷土愛が高まって出てくると思いますね。そしてこれを大切にしなきゃいけない。街のように経済的に豊かになればいいわけではない。しかし、経済的に豊かになることも重要です。そういうことも観光でまちづくりに絡めてやっていこうと。こういうことが若い人たちにどんどん繋がっていくといいのではないかと思いますけどね。そういう若者にせと短に来てもらいたいですね。

【川田】

せと短で是非そういう風に、教育をしていけないですかね？

【安村】

東京も大阪もいいけど、ちょっと行って見て、そこが気に入るかもしれないけど、若いうちは自分たちの魅力を一度見直す機会を作ってもいいかもしれないですね。



【内田】

コミュニティが停滞していてどう頑張るかという時によく「よそ者」「馬鹿者」「若者」がいると言いますが、特に若者がいるというので、やはりそういう意味では観光大学の意義がかなりあると

思います。地域の話でいうと地元学がありますよね。九州の水俣市で地元学で頑張っている吉本さんという市役所の元職員さんがいて、その方がすごく強調している話は、地域の者たちにはないものねだりをするなど言っていて、あるもの探しをするんです。昔、実際に水俣市に行って学生と一緒に話を伺った時にすごく強調されていて、プライドをどう作るのかという時に、地元これがないのに東京にはある、これは地元にはないのに大阪にはあるというのではなくて、あるものが実はすごく魅力的だと。今、学長がおっしゃったように外の

ことを知って戻って来てならその差異がすごく分かる。そういう視差がなくて
もなんとかなるかもしれませんが、視差があると本当にいいものができるよ
うな気はしますね。

【安村】

もう一つは、外から来た人に自分のところの魅力を教えてもらうという、地元
の人たちが教えてもらうというやり方もあると思うんですよ。これは観光まち
づくりの客体視と言って、人の目を通して、まさに眼差しを通してそれを聞く
ことで再発見すること。自分たちの本当に魅力がいっぱいあるのに、生活の中
に紛れて普段見過ごしてしまっているようなことを、外から来た人が「これ素
晴らしいですね」「これは本当にいいのかな」と。そこで見直してそれを観光
資源として人に見せて工夫をするという経路もあると思うんです。

水俣市はかつて 1950 年代に、公害で大変なご苦労をされているわけですね。
それを再活性化、回復する時に、そういう魅力を再発見していくことはできた
と思いますが、やはり地元学で先ほど内田さんが言われたように、自分たちの
魅力に気づく、宝探しとか他の言い方をすることもありますが、とにかく
自分たちの魅力の再発見というのは重要なキーワードになってくるでしょ
うね。

【内田】

観光の原石は多分全国にあります、その原石をどう磨くか、どう見せるかとい
うか、本当に原石はありとあらゆるところにあって、別に四国だけではなく、
だけど地元の人には気づかないということはあるかと思うので、そういうも
のを見つける視力っていうのを、学生さんが見つけられたらすごいと思う
し、そうありたいと思います。

【安村】

昔、私が三重県にいた頃、もう亡くなられてますが、JR 東海の須田寛会長がい
らっしゃって、その方は常在観光という常に在る観光という言葉を作られて、
今、内田さんが言われたようにもうどこにでも魅力がある地域にもそれを見つ
け出すことが大変なので、それを見せるために、広報も含めてやることが大変
だと、まさにそういうことが今、日本中で起こっていると言っても間違いでは
ないですよ。

【内田】

それはもういろんな形で、歴史から見たらひよっとすると負の遺産になるかも
しれないものというのも観光対象でもあるし、地域のこんな悲しい歴史があっ

たが歴史の一つなので、それを認めて人に知ってもらおうというだけでもいい要素があると思いますので、いろんなツーリズムのあり方がありますよね。

【安村】

ダークツーリズムと言いますが、例えば、広島とか長崎の悲劇の記憶ですよ。こういうことも人にすごく迫ってくるものがあるわけじゃないですか。もう一つはそういうところにインバウンド観光客も来ますよね。ですから、もう日本人だけではなく、海外の人を魅了するのが地域の魅力としてあるという。おそらく今後の四国も香川も、インバウンド観光客さえも呼ぶような魅力が色々あるんだと、今回そういうことも対談で出てきたと思います。

【川田】

ありがとうございます。

あともう一つ、9名の方々それぞれ、キャリアや経験について伺いしてきました。それぞれの方が興味深いキャリアや面白い経験をされていたかなという風に思います。ご自身が経験されたことから、学びや行動のきっかけというのを得られておりました。共通点としてはそれぞれやってくるチャンスを逃さずにキャッチして、それを活かしていたという共通点があるのかなという風に思いましたが、それぞれの方々の考え方や価値観、キャリアについて何か印象に残っていることや、人材育成について学生を育てていきたいといったところがあればお願いします。

【安村】

漠然としていますが、どの方も新しい情報をよく知っておられて、新しいことを見つけるという能力や感度が、非常に高かったと思います。先ほどから話している郷土愛が根っこにあったと思うんですよ。それと新しいものをどんどん知識や情報として、蓄えていくという能力とそれから自分の地域への郷土愛。伝統的な文化や自然の素晴らしさというものが結びついて、今回対談した方々の活動が出てきているということを感じました。

【川田】

アンテナの貼り方が上手で、情報の収集の仕方というのはあるかもしれないですね。

【内田】

それは才能なんですかね。それとも後天的なのか。学校に務めている身からすれば、そういうアンテナの貼り方とか、磨き方みたいなことを学生に伝えられたらいいと思いますが、例えば私であればその地域の魅、先ほどの普通に転がっている石は「これはこう見たらこうなるよ」「こう磨いたらすごく綺麗

でしょ」みたいなどころまでは教えられると思うんです。ただ、そこから先は本人の才覚なのか、そこから先も教師が手助けできるのかというのはちょっと分からないです。

【安村】

でもやはりストーリーを聞かせると「あ、こういう発想もできるんだ」ということが積み重ると、いろんなことが出てきますし、確かに、今の内田さんのおっしゃる通りで、私が奈良で神社に行くと何の変哲もない石が転がっていたりするんですよ。ところが春日大社の人に聞いてみると、こんなストーリーがあるんだということは何度か聞きまして。なんでこんなところにこの石が転がっているのかなと思って春日大社の宮司が「邪魔だから春日の原生林に置いてこい」と言ったその日に古文書を読んだら、そのストーリーに石の由来が出てきたんです。だからまた「戻してこい、そこに置いとけ」と。やっぱり色々説明したりするらしいですよ。そうすると見る人も関心するでしょ。こんなところにポコッと置いてあるけど、そういう話なんだ。やはりそれは文化や価値や意味が絡み合っているところで観光資源が生まれてくるってこともありますよね。ストーリーが大切ですよ。

【川田】

そのアンテナの立て方なんですけどやはり疑ってみる。「こうなっているのは何でなんだろう」と、その全ての興味というところなんじゃないかなと思って。なんでなんでと考えていくとまわり道をすることもあると思います。ですが、キャリアを聞いていて、関係ないと思っていたことが後々繋がってというお話をされていた方が多かったかなと思います。四之宮社長もそうですよね。最後、回り回って一番やりたかったまちづくりのところに行きついたというお話をされていたと思いますし、香川大学の原先生もいろんなことを経験して、この研究をやっていききたいという風に思ったとおっしゃっていたと思うので、いろんな日々のことをなんでと思いながら色々やってみるということも重要なかなと思ったりしました。

【内田】

それはね、今学長が提承する“「考える」を学ぶ”ということですよ。

【安村】

おっしゃる通りです。「なぜ」というのは大学教育の基本だと思うんですよ。そして、なぜっていろんなところでなぜなぜって考えると、その教材としてやはり観光で地域を作るというのは、先ほど内田さんの話にもあったし、今川田さんにも指摘された通りですが、やはり地域で「何なのこれ」「なぜこうなる

の」「なんでみんなこんなに惹かれるの」なぜという問いでどんどん考える、こういう方向にカリキュラムや実習を作っていきたいなと思っています。それは是非やっていきたいですね。

【内田】

学生に教材として「こういう観光現象がありました。過去の例で、これがなぜこんなにヒットしたんでしょう」みたいなね。一緒に考える。先に答えを言わずに考えてもらって、いろんな意見は出てくるんだけど、「事実としてはこうでね…」という話をして。最後にレポートを書かせると「こんなやり方もあるんだ」みたいな。賢い子がそんなレポートを書いてくれるんですね。

【安村】

その中で新しいものも発見できるかもしれないですね。

【川田】

ちょうど先ほど言った都会に出たりするというのは、地域の中にいるとそれが当たり前になるけれども違う角度から見たらそれは当たり前ではなかった、ということですね。

【安村】

眼差しの転換というのは重要ですね。

【川田】

是非せと短からそういった“「考える」を学ぶ”「なぜ」という問いを立てることを進めて、郷土愛ある学生を、人材を育てていけたらいいかなと思います。瀬戸内・四国地域は、人をはじめ、たくさんの魅力がある地域だと思います。地域の資源を活かしながら、地域創生やまちづくりに実践的に役立てていき、地域に学生を送り込んで、地域愛に溢れる観光分野の専門人材を育てていきたいと思います。約1年に渡る対談シリーズありがとうございました。

【内田】

ありがとうございます。

観光振興・地域創生に対する取り組みを、せと短は頑張っていきます。色々発信いたしますので、よろしく願いいたします。

【安村・川田】

ありがとうございました。



 **せとうち観光専門職短期大学**
SETOUCHI